

教団新報

定 価 1部150円(本体137円+共214円)
予約購読料 1年分 千共 5,350円
紙代のみ 3,750円
振替 00140-9-145275
本紙を購読ご希望の方は、前金を
そえて、お近くのキリスト教書店
へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内 電話03(3202)0546
FAX03(3207)3918
URL <http://uccj.org>
発行人 秋山 徹
編集主筆 嶋田 恵悟
印刷所 株式会社きかんし

クリスマス メッセージ

平和を歌うクリスマス

ルカによる福音書2章8～20節



竹澤知代志

新しい王の誕生

世界で最初のクリスマスに招かれ、礼拝を捧げた人々には、幾つかの共通点があります。深夜に寒い場所、孤独な思いをし、貧しいこと、それでも誇り高いことなどが挙げられます。羊飼いたちこそ、これに当てはまります。

ユダヤ人のご先祖は、羊や山羊などの小さい家畜を飼うことを生業としていました。日本人にとつての農業と同様に、一種の聖職です。本来は、誇り高い仕事です。しかし、これも日本と同様に、経済的には報われず、なかなか手のない、人気の薄い職業になっていました。この地方の、夜には急激に冷え込む気候の下で、時に寝るの番をし

乳飲み子を見た羊飼

しかし、何と、天の軍勢は弓矢を取るのではなく、神を讃美する歌を歌い、平和を歌うものでした。

彼らが都に攻め上ることとはありません。羊飼いたちの希望は、たちまちに潰えました。

しかし、彼らはそれでも何故か、天使に告げられた御子に会うために、急ぎ出掛け、「飼葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てました。」「乳飲み子」です。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあり、地には平和、御心に適う人にあれ。」…。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。(ルカ2・8～14、20節)

玉川平安教会 (東京教区南支区)



玉川平安教会 (東京教区南支区)

闇の彼方の光を見詰めて

「現代を言い表す言葉は、不安と焦燥」と言っただけで済んでしまふ。か、その現代とは、いつだったのでしょうか。誰にでも、いつにでも当て嵌まるように思えます。現代もまた、不安が支配する時代です。焦燥が、一層不安を煽り立てる。私たちが駆り立てます。私たちは、何かしら安心材料を求めます。エッセイや書に現れる偽預言者のように、安心を説く学説に魅了され、これにしがみつきたくなりま

は、元の荒野です。寂しい、寒い、貧しさだけが待っている場所です。しかし、彼らは慰められました。彼らは満足しました。新しい王を見たからです。その前に跪き礼拝することが出来たからです。

羊飼いは、天使のお告げを受ける前と、その境遇は、何一つ変わっていません。しかし、彼らは、決定的に変えられました。

「主が遣わすメシアに

ここに登場する羊飼いたちは、おそらくは雇われ人でしょう。羊も山羊も彼らの財産ではありません。夜通し働いても、大した収入にはなりません。その貧しさから這い出すチャンスもありません。こうした人々にとつて、戦争こそ、金儲け、立身出世の機会です。新しい王の誕生は、世に報われない者にとつて、千載一遇のチャンスです。

王が誕生した地、ベツレヘム向かう彼らを援護

う。先駆けとなった羊飼いは、一番槍の手柄で、褒美を受けることでしょう。

総幹事 秋山 徹

しかし、彼は全く変えられませんでした。「この目であなたの救いを見たからです」。

3・11の年のクリスマス、祭壇の燭火は、特別の意味を持ちました。蝋燭は、世界の闇と、心の闇とを、際立たせました。闇をどこまでも見詰めて、一筋の光を願い求めました。今年のクリスマスも、闇を凝視し、闇の壁を貫いて、壁の彼方の光を見詰めてみましょう。

(玉川平安教会牧師)

新型コロナウイルス
感染拡大の渦中で

医療専門家たちの声に聞く

大友 宣 《老蘇会・静明館診療医／日本聖公会・札幌聖ミカエル教会員》

ウィズコロナの宣教



その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへイエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

ヨハネによる福音書
20章19節

今こそ、わたしたちは教会から平和を携えてでかけていく時期です。新型コロナウイルス感染症の影響が社会の至るところに出ています。病院や施設では家族と会うことは出来ません。社会では仕事がなく、補償もなく戸惑っている人たちがいます。家庭内暴力、孤独、貧困の問題が大きくなります。分断と格差の拡大があります。イエスはこのような時代にこそ生きています。それなのに、教会は今、機能を十分発揮することができていません。

弟子たちはユダヤ人が怖くて部屋に鍵をかけてじっと家に閉じこもっていました。現在のわたしたちも似ています。そこにイエスが現れ、弟子たちに平和のメッセージを送ります。恐怖の限界の中にいる弟子たちにとって、平和なのは部屋に閉じこもったままでいることでした。その時に主の平和がもたらされたのはなぜか。それは、復活のイエスに出会ったからです。

イエスは続けます。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」。弟子たちは扉を開け、外に行き、宣教の業を始めます。それはユダヤ人が居なくなったからでも、迫害の恐れがなくなったからでもありません。新型コロナウイルス感染症はなくなってしまうこともなく、怖さをひしひし

と感じます。どのようにわたしたちは遣わされるのでしょうか。

第一に、わたしたちは何らかの対策を考えた上で教会生活ができるように工夫することができません。

「教会における新型コロナウイルス感染症対策ガイド」を作りました。教会でクラスターが起きないようにしながら教会生活することは大きなことです。

次に、新しい教会の日常を創り出すことが必要です。今までの教会の仕組みでは高齢者がなかなか出席しにくい。施設や病院への病者訪問はしにくい。教会の主催で集会や交わりの場を持つことが難しい状況です。

そして、イエスが命じたように主の平和と共にわたしたちは遣わされます。平和を携えてでかけます。教会を含めた社会では、新型コロナウイルス感染症の流行の中で限界を感じている人々が今たくさん居ます。教会自体もそのような限界にあります。社会の至るところに裂け目が出来ています。主が与えてくださった平和をもって生きることが、イエスの弟子としての私たちの使命なのではないかと思えます。

【日本キリスト者医科連盟全国委員、「教会における新型コロナウイルス感染症対策ガイド」を編集】

藤井 明子 《さくらキッズくりにつく院長／聖ヶ丘教会員》

変わらない恵みが伝わることを願って



私は小児科医として都内クリニックで働いています。おもに小児神経・発達外来を行い、年間に2500名を超えるお子さんを診させていただいています。

原稿を書いている今は2020年11月中旬です。日々コロナの感染者数は変化し、その度に対

応・対策が変化しています。振りかえると、2月下旬に突然、休校措置が決まり、わが家の子どもたちも長い自宅での生活を余儀なくされました。毎

日曜日の教会堂での礼拝参加も出来なくなりまして。私の勤めるクリニックでは、急な環境変化についていくのが難しい子どもたちの相談が増えています。中学校に入学したものの学校に登校できず、長い自宅での生活に

なり、オンライン授業を始めとする生活に慣れ、オンライン以外での社会的な繋がりが持てなくなったり、学校に行けなくなったり、不安が強くなったり、眠れなくなるとか、外に出るのが怖くなったなど様々な相談があります。

小児科病棟では、親御さんの付き添いができなくなり、面会時間も従来よりも短時間に制限されています。

★ 私たちを取り巻いてい

る悩みや問題は大きく、時には子どもたちと親御さんと一緒に悩むこともあります。一人の小児科医として、また、子どもたちよりも少しだけ人生の先輩として何を伝えることができるのだろうか、いつも問い続けています。

今回のような想定外の事態に置かれたとき、私たちには、生きるための土台、存在全体を照らす光が大切であるということとを強く想われます。それは「いのち」と「存

在」の肯定です。クリニックでは、教会に誘ったり、神様のお話をすることはあります。しかし「神様がわたしたちと共にいられる」ということに、私自身が支えられ、信仰に踏み込めなくて毎日歩ませていただいています。そして、すべての命が神様の愛と御手の中にあるというのを心に刻みながら、親御さんや子どもたちと接しています。

親御さんや子どもたちが「先生とお話すると気持ち落ち着きます」とか、「先生となら話せるし、ホッとするといい」といってくださることもあり、神様の御業を日々感じながら過ごしています。

「コロナ鬱」について尋ねられることが多くなっている。国中が酸素欠乏に陥ったような昨今の状況下で、メンタルヘルスの不調がさぞ増えているのではあるまいかと、もっともな懸念である。

ただ、不調のありようは様々ではない。コロナ肺炎の感染者やその家族、医療や福祉に従事者など直接の被害者・関係

明日へのヒント

石丸 昌彦 《精神科医・放送大学教授／柿ノ木坂教会員》



者の辛苦は察するに余りある。飲食店の経営者や従業員のように、コロナ禍とコロナ対策の煩りを受けて経済的に窮迫する人々の苦悩も深刻であろう。

一方、より間接的で目に見えにくい悪影響の蔓延も見逃せない。卑近な例では、互いにほどほどの距離を保って安定していた夫婦や家族が、外出自粛で四六時中顔をあわせるようになった途端、些細な口論や諍いが絶えなくなったといったことである。感染者や経済的困窮者の苦悩に比べれば「その程度のこと」ではないが、「その程度のこと」が長期にわたるにつれ、ボディブローのように心の体力を奪っていく。

「コロナ鬱」という言葉から筆者が連想するのは、主としてこのようなものである。そして多くの教会が直面しているのもこれに似て、じわじわと体力を奪っていく慢性的な機能不全ではないだろうか。

この種の問題に対応するのは容易ではないが、一つ考えてみたいのは、その多くが実は「今に始まったことではない」ということである。社会を見渡せば、職場の過剰労働とハラスメント体質、社会格差と家庭の貧困、地域ネットワークの不在と生活者の孤立など、いずれも前々から指摘されてきたこと

が、コロナ禍をきっかけに抑えがたく顕在化している。潜在的な弱点がスプレッド負荷によって顕在化するの、普遍的な構図である。真の原因は、たまたま襲ってきたCOVID-19ではなく、もともと存在した構造的な矛盾のほうではあるまいか。

それならここは一番、これまで先送りしてきた問題にあらためて正面から取り組んでみたらどうだろう。諸々の活動を停止・縮小した分、時間だけは十分にある。それぞれの教会でテーマを選び、この機にどう変わりたいか、皆でじっくり考えてみるのである。

皮肉なことに精神医療の現場では、コロナ禍をきっかけに長年の苦勞から解放された人々も少数ながら存在する。パニック障害に伴う乗り物恐怖を抱えていた人々はその一例で、通勤電車の殺人的な混雑がテレワーク推進で緩和されたおかげで、生活が劇的に楽になった。長年飲み続けてきた向精神薬が不要になった例すらある。

どんな災難にも、必ず明日へのヒントが隠れている。コロナ禍自体は決して歓迎できないが、これを神が与え給うた自問と成長の機会とすることは十分できるはずだ。それは世々の教会が現にたどってきた道でもある。

【キリスト教メンタル・ケア・センター副理事長】

社会事業奨励日メッセージ

以前、リユーベックに住んでいる知人を訪ねた時、ヨーロッパで最も古い病院の建物があるというので案内してもらった。当初は貧しい人たちのための福祉医療が行われ、後々介護施設や老人ホームといった性格を強めていったとのことであるが、院内病室はすべて個室となっており、恐らく時代を前後して流行したであろう疫病への対策にも有効であったように感じた。その場でどのような治療がなされたのかは知る由もないが、当時の医療スタッフは心を込めて（時に命がけで）患者と向かい合っていたはずである。

現在私が勤めている病院（教団の社会事業団体の一つ）は緩和ケア専門病院として48床が稼働しており、そのほとんどが個室となっている。とはいえ、このコロナ禍の状況で、もし病院スタッフや関係者が外部で感染

あるがゆえにその働きを背後で支えている教会の仲間たちがおり、その祈りに支えられてきたこともまた事実である。今後、コロナ禍によって人と人との隔たりが物理的距離となる状況の中で、人と人とを結ぶ精神的な（信仰的な）つながりが強められていくことを、また社会事業団体と教会の絆が強められていくことを願ってやまない。

今年も12月第1主日の「ギリスト教社会事業を覚えて祈る日」を迎える。教育・医療・福祉などさまざまな分野においての社会貢献に感謝をすることにも、これからの時代に、心を込めたその大切な働きを世に知らせ、多くの人々に分かち合ってもらいたいと願っている。ギリスト教社会事業に関わるすべての方々の働きに共に祈りを合わせていきたい。

2020年12月6日
第41総会期日本基督教団
社会委員長 森下 耕

教区議長コラム

◆ 西中国教区 ◆
小畑 太作

ある月曜の午後、宇部市内のある病院に電話をした。
前日、主日礼拝に来た90歳を超えるある女性から、春から入院している二人暮らした夫に面会して欲しいとの依頼があった。感染予防で面会謝絶の中、こうした方について

ある月曜の午後

程を約束した。
病院の対応は、案の定、頑なにわたしの面会を拒絶した。曰く面会可能なのは「支援者」と「家族」のみなのだ。しかし聞けば、「支援」の枠組みも「家族」の中身も曖昧でしかない。心や魂への配慮も考慮すべきではと、果ては信教の自由の補償義務や牧会権の話までして、再考を求めたが、折り返しの電話でも結果は変わらずであった。
次の手立てを講じる前に、

事務局報

上田啓悟（無任所教師）



20年8月9日逝去、66歳。兵庫県生まれ。91年准允、95年受按。91年より御影、甲東、尼崎、兵庫本通教会を牧会。遺族は娘・坂根歩さん。
長谷川淳子（隠退教師）

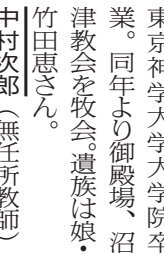


20年10月22日逝去、89歳。愛媛県生まれ。57年農村伝道神学校卒業。同年より前原、渋川、東根、熊取教会を牧会し、09年隠退。遺族は娘・長谷川恵子さん。

延原時行（無任所教師）



20年10月23日逝去、83歳。岡山県生まれ。62年同志社大学大学院卒業。同年より伊丹、加茂兄弟団教会を牧会し、敬和学園大学に務めた。遺族は義妹・佐々木順子さん。
須加崎泰宏（無任所教師）



20年11月2日逝去、91歳。長崎県生まれ。58年東京神学大学大学院卒業。同年より御殿場、沼津教会を牧会。遺族は娘・竹田恵子さん。
中村次郎（無任所教師）



20年11月9日逝去、90歳。福岡県生まれ。59年同志社大学大学院卒業。同年より長崎住吉教会を牧会し活水学院に務め、福岡警固教会を71年まで牧会。遺族は妻・中村順子さん。

正教師登録

合田やす子 (2020・11・13受按)	諫早 就(主)長谷川渉	
佐藤 繁、新藤 豪 (2020・11・23受按)	津屋崎 就(主)大島一利	
宮本裕子 (2020・11・24受按)	小野田 就(主)小畑太作	
齋藤 正 (2020・11・26受按)	与勝 就(主)芳澤 信	
金子 智、平向倫明、 山野 心、大久保一秋、 渡邊典子、森永憲治 (2020・11・28受按)	宮古島 就(主)尾毛佳靖子	
教師異動	立川 辞担、細川美江 就(主)坂口聖子	
聖ヶ丘 辞担(長手陽介 石岡 辞主)荻野英夫 就(主)福島純雄	調布柴崎就(代)願念 望 越谷 辞担(鈴木恵子 春日部辞(主)白石多美出 就(代)石橋秀雄	平良川辞(代)玉那覇正信 就(代)林 利行
就(担)白石多美出 就(担)白石多美出 就(担)白石多美出	高橋初生、白石多美出、 山形孝夫、尾毛佳靖子、 鈴木恵子 教師休職 福山隆一	
左内坂 就担)宮島星子		

全国伝道推進献金報告についてのお詫び

総幹事 秋山 徹
「全国伝道推進献金」へのご協力感谢您を感謝いたしております。2020年6月25日付にて1回目の集計をし、献金額および各教会・伝道所・各教区への交付金報告を一斉発送しました。その報告に基づいて送金後、一部に誤りがあることが判明しました。以下のように訂正してお詫び申し上げます。
『九州教区日向新生教会への指定献金5,000円』の報告が漏れておりました。なお、教会・伝道所を覚えて献げられた74件(指定する教会・伝道所の記載なし2件含む) 239,434円の総額に変更はありません。

『アレティア』休刊のお知らせ

『説教黙想 アレティア』は111号をもって一時休刊とさせていただきます。特別増刊号は刊行を続ける予定です。引き続きよろしくお願ひ申し上げます。
2020年12月
日本キリスト教団出版局

日本伝道の推進を祈る日

毎月第3主日「日本伝道の推進を祈る日」のために、祈禱課題が『信徒の友』に19年12月号から掲載され、14教区と東京教区5支区の協力を得て20年8月号で1巡目を終えました。
21年3月号より2巡目が始まります。2巡目は『信徒の友』編集室の全面的な協力によりレイアウトを新しくし、モノクロ2頁となります。
「(1)祈禱運動―共に祈ろう、(2)信徒運動―共に伝えよう、(3)献金運動―共に献げよう」の3ローカンを掲げて運動を展開していきます。1巡目は、共に祈ることから始めました。第3主日の礼拝でこの運動を覚えて祈った教会がありました。信徒の友が『信徒の友』編集室には寄せられました。また全国伝道推進献金には、260万円が献げられました。ご協力に感謝いたします。しかし、まだまだこの運動は、全国の教会・伝道所に広まっていません。
2巡目は、(1)教区の伝道の働きについて、(2)教会・伝道所の働きについて、(3)第3主日に祈りに覚えてほしい課題、(4)2教会(伝道所)のために、以上から各教区が選り、編集室から寄稿を依頼します。また記事が教団のホームページに掲載できるよう準備しています。

「全国伝道推進献金」について1巡目は、(1)教会・伝道所指定、(2)教区指定、(3)教団伝道推進のために、(4)信徒運動のために、と4つの項目に分けて協力をお願いしました。4つに分けられていることが分かりにくいとの指摘がありました。2巡目からは一本化します。各教会・伝道所、教区への指定献金も可能です。改めて献金の運用指針については検討します。
コロナ禍拡大の中で、教団の祈りのネットワークに繋がり、支え合ひましょう。
(岸 俊彦報)

『信徒の友』掲載スケジュール

掲載号	掲載教区
3月号	北海、奥羽
4月号	東北、関東
5月号	東京（東支区、西支区）
6月号	東京（南支区、北支区）
7月号	東京（千葉支区）、西東京
8月号	神奈川、東海
9月号	中部、京都
10月号	大阪、東中国
11月号	西中国、四国
12月号	九州、沖縄

*掲載を断る教区がある場合は、繰り上げる。



上＝やまばと希望寮
右＝榛原教会、山田静夫牧師夫妻と筆者



会ではなく社会福祉法人でなければならぬので、法的には、「(福)聖隷保養園(現在の聖隷福祉事業団)」の一つの施設として開始。実質的な責任は「やまばと学園運営委員会」が担いました。9年後に「(福)牧ノ原やまばと学園」として独立。本年は、創業50周年に当たります。

重度障害児に挨拶を教える様子に感動し、そのエピソードを幾度も息子に言い聞かせたそうです。十数年後、民生委員になった息子さんは「やまばと」支援者の一人にもなり、そのつながりの中で、地域の人々が大勢、餅つき等の奉仕に来てくれるようになりました。

最初の施設建設の定礎式(着工に当って聖書を礎として地中に埋める式)において、長沢は、神を賛美し、その導きに感謝し、工事従事者の安全と、み

入所施設で始まった当法人の働きですが、今では通所施設や、訪問介護、相談支援等、地域で暮らす障害者や高齢者を支える活動が増え、事業所の数は、30、職員数は470名です。しかし福祉は、規模の大きさではなく、その中身が重要なので、その意味では今も道半ば、未熟な点が多々残っています。

「わたしたちはここで事業をしているのではなく、最も弱い人たちを中心とした共同体を形成しようとしている」という創設者のビジョンは神から与えられた志だと私たちは受けとめています。今後もやまばとの道しるべであり続けるでしょう。

農村伝道のため尽くされた前任者のM・マクラクラン宣教師に感謝しながら、わたしたちもこの地に、福音に生かされ、神と隣人に主體的に仕える人々が起こされるよう祈っています。最後に、全国の教会関係者の皆様に、長年にわたるご支援を心から感謝し、主の恵みがありますようにお祈り申し上げます。

「兵庫県南部大地震記念の日」追悼礼拝
◎日時 2021年1月17日(日)午後6時
◎オンライン映像配信による開催
アクセス先 <https://hyogokyoku.web.fc2.com/>
◎「今の不安の中で阪神淡路大震災からの26年を想う」 市川哲牧師(芦屋石園教会)
◎主催・問合せ 日本基督教団兵庫教区
(TEL 078-856-4127)

次に、小林明センター主事より辞意が表明された。委員からは慰留の声も多く出たが、当人の思いを尊重し、長年のセンターの核となる働きに感謝しつつ21年3月末での辞任を承認した。また、後任者を選考するにあたり、教団内における「センター主事」の勤務条件

が明文化されていないことが分かった。小林主事からは、センター活動を維持するには、現在の勤務体制が必要最低限であることが説明された。運営委員会は、内外に確約した教団の部落解放運動が新体制でも維持されることを強く求めていく。

初めて教会の礼拝に出席したのは13年前。無理が重なり休職していた頃。自分で自分をどうにもできない日々。以前から、次女が通っていた教会付属の幼稚園を通し教会の話を妻から聞いていたのを思い出して通うように。礼拝を守りながらカウンスリング感覚で牧師との面談を重ねた。ある時「洗礼を考えてほしい」と言われ「断る理由がない」と決心。約1年半の受洗準備を経て2008年のクリスマス、妻と共に茨木教会で田邊由紀夫牧師より受洗した。

受洗準備会で牧師が話していた「大いなる計画」「すべてが備えられている」との言葉に驚いた。思い返せば生ま

れ育った町も、結婚して最初に住んだ町も、転勤先もギリシヤンゆかりの土地だった。偶然とは思えなかった。それに次女が茨木教会の幼稚園に通わせたのも、前の勤務地で「近い」という理由で長女を教会幼稚園に通わせ、キリスト教保育に好感を持っていたから。神様の大きな計画の中ですべて備えられていたのだと思わずにいられない。

この春から東京に単身赴任となり大阪と東京を行き来する生活に。茨木教会の礼拝に毎週は出席できなくなり、9年間仕えてきた長老職も現任より退いた。「自分の世代が

場した光景を思い出します。あの時は、長崎や広島から核の使用の非道徳性を指摘して、すべての命を守る責任があることを世界に訴えていましたが、期せ

もっと教会を支えるべきなのに申し訳ない」と話す一方、これも神様の大きな計画とも受け止める。東京ではいくつかの教会で礼拝を守っているが「他の教会を見て学ぶ機会が神様から与えられた」と。

最近、世界教会協議会と教皇

庁諸宗教対話評議会との連名で「諸宗教の連帯による傷ついた世界への奉仕」コロナ危機とその後における省察と行動を求めるキリスト教の呼びかけ」が出されました。キリスト教諸派だけでなく諸宗教が連帯して、「弱い立場におかれた人々を支え、苦しむ人を慰め、痛みと苦しみを和らげ、全ての人の尊厳を確保するよう努めましょう」と勧め

「わたしの隣人は誰か?」の問いに立たせられます。
(教団総幹事 秋山 徹)

伝道報告

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

神に栄光、地に平和

(福) 牧ノ原やまばと学園理事長 長沢 道子

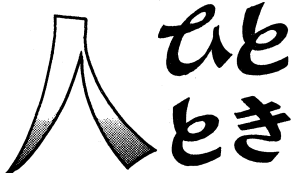
重度障害児に挨拶を教える様子に感動し、そのエピソードを幾度も息子に言い聞かせたそうです。十数年後、民生委員になった息子さんは「やまばと」支援者の一人にもなり、そのつながりの中で、地域の人々が大勢、餅つき等の奉仕に来てくれるようになりました。

第6回部落解放センター運営委員会は11月5日、ウェブ会議サービスを利用して開催した。各教区運営委員15名の出席と東京五支区代表者ら10名の陪席であった。

「部落解放奨学金」の進展が報告された。日本基督教団の教団立・認可神学校はもとより、NCC加盟教団の神学校を中心に、13校へ周知を行い、既に2件の申請があった。支給上限額40万円を守りつつではあるが、要望にできるだけ応えていきたい。

最後に、各教区・支区からの活動報告では、コロナウイルス感染症に伴い、全体的に活動の場が狭まっている状況が共有されたが、同時に新しい可能性の示唆もあった。たとえば北海教区は、部落差別問題学習会をオンラインで開催すること

会社でマーケティングの仕事をしている森藤さん。その立場から教会の伝道を見た時、いかに福音を聞く耳を呼び起こすかが大切、そのために教会幼稚園は大きな役割を果たすと考える。付属幼稚園から教会につながる、かつ現役世代だからこそその視点だ。伝道の幻を抱きつつ、再び教会に仕えるその時に備えている。



森藤 文郎さん

大いなる計画の中で



1968年大阪府出身。食品メーカーに勤務。茨木教員